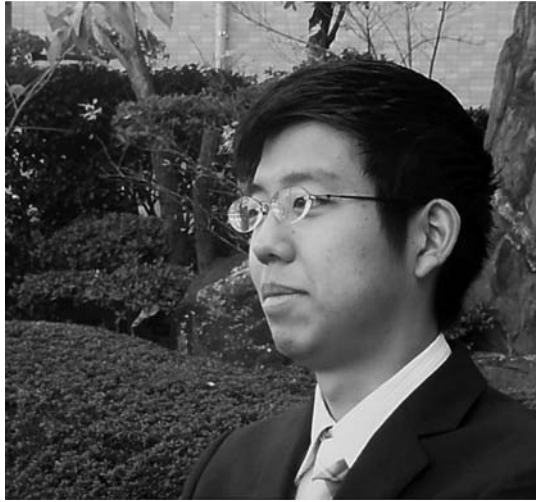


渡邊 恭平さん

自然環境科学プログラム



— 総科ではどのようなことを勉強されていますか？

私は自然環境科学プログラムに所属し、砂防学を専門に勉強しています。現在、海堀正博先生のゼミに仮配属中で、ゼミの先輩の実

験を手伝って土砂の状態を測定する日々を過ごしています。来年度はここで土砂災害に関する卒業研究を行う予定です。

こんな私ですが、1年生として総科に入った時には砂防や土砂災害を専門にするとは決めておらず、好きな教科である「理科」か「人の役に立つこと」をやりたいな、とだけ考えていました。そのため、授業も自然環境科目群以外に、語学やビジネス、教育学、国関係など、興味があるものを片端から取ってきました。時間が経つにつれ徐々に絞られていき、なお国際問題や大気汚染、水質汚濁など他にも学びたいことがある中で、最終的に砂防を選ぶきっかけとなった出来事が、平成26年8月20日の豪雨で広島市安佐北区・安佐南区に発生した土砂災害です。災害発生後、目にするニュースでは連日、多くの方が亡くなり、帰る場所を失ったことが報道されていました。私はボランティアとして住宅内に流入した土砂の撤去作業などに参加し、土石流によって多くの家や道路が破壊されているのを目の当たりにしました。

この災害とボランティア体験を通して、科

学技術の進んだ現代の日本でも、自然災害によってこんなにも多くの人の命や生活が脅かされることもあるのだということに改めて痛感しました。そして、自分にできることで一番直接的に、かつ多くの人の生活や命を守るのには災害対策であると確信しました。こうして災害対策の道、つまりは砂防学の道に進むことを決め、今に至ります。

— 課外活動で頑張っていることは何ですか？

二度のキャンプ砂防(国土交通省砂防部主催の、中山間地域の砂防について現地で学ぶことを目的とした学生向けイベント)への参加、インドネシア・中国への短期留学、「飛翔」のライター活動、ベンチャービジネスコンテストや英語でのスピーチコンテストへの参加など、興味を惹かれることは何でもやってきました。砂防以外で今やっていることとしては、広島の他大学の学生と協力して、「広島で働く若者図鑑」プロジェクトというものを進めています。このプロジェクトは、我々ライターが広島企業の企業で働いている若い社会人の方にインタビューを行い、その内

容を記事にまとめて web サイトにアップし一般学生向けに公開するというものです。日々の業務の内容や仕事中の社内の雰囲気、求められる能力など、我々学生が会社に就職した後の様子をイメージする助けとなる内容を掲載することで、企業と就活生との間のミスマッチを減らし、両者にとって「良い採用」につなげるお手伝いをさせていただきたいと考えています。近日中に web サイトが完成すると思うので、ぜひ一度見ていただければと思います。ライターの方も募集しておりますので、興味がある方は連絡ください。また、今の私には『広島を強くしたい』という思いがあります。G1 COLLEGE という、各分野で日本を引っ張るリーダーとして活躍している若者を全国から集めて行うイベントがあり、昨年私はボランティアスタッフとして運営を手伝いました。その時、中国5県のうち広島だけ参加者が0だったことに強い衝撃を受けました。最初は広島にリーダー足り得る若者がいないからかと思いましたが、今ではそうではなく、広島若者の各活動が小規模に留まっていること

が原因だったのだろうと分析しています。平和活動や途上国支援などを独特の切り口から行っている魅力的な学生団体は広島に多く存在します。だから、広島で何かをやるうとしていた学生同士や団体同士を繋いで、活動をもっと拡大・活発化させていくための活動を、秋ごろから本格的に進めたいとも考えています。

―― 将来は砂防もしくは他の災害対策関連の職を目指しているのですか？

はい、国家公務員として国土交通省に入っ  
て、砂防を仕事にしたいと思っています。同じ砂防の仕事としては建設業社なども魅力的です。しかし、例えば同じ砂防ダムの建設に関わる仕事でも、発注を受けて指示通りの場所を作る仕事よりも、限られた予算内で最も多くの家や道路を守るように建設する位置や数を決める等、計画して発注する仕事の方が、知識や能力を活かして多くの人の命や生活を守ることができると思います。だから、計画を立て発注する側である公務員の仕事に魅力を感じています。ゆくゆくは、日本だけでなく発展途上国の砂防にも関わって

みたいですね。ただ、僕の場合長いこと進路に迷っていたので、勉強のスタートは遅くなってしまっています。今は5月に控えている採用試験に向けて、1日平均6時間ぐらい勉強をしています。

―― 総科の後輩に向けてメッセージをお願いします

興味のあることには、何でもチャレンジしてみてください。やってみないとわからないことをやるチャンスが手に入るのが、総科生の最大の強みの一つだと思います。やってみるしかないですよ！ 広大・総科には様々な先生の教えを乞う機会や面白いイベントがたくさんあります、最大限活用してください。「広島で働く若者図鑑」プロジェクト等、渡邊のやっていることに興味がある方は左記のメールアドレスに連絡ください！

Email: [watanabekyo.da@gmail.com](mailto:watanabekyo.da@gmail.com)

編集者

27生 小川 巧

大崎 壮巳

☆赤坂 由梨子さん

Mode For Smiles 副代表 4年

〈人間文化プログラム〉

☆山下 いずみさん

Mode For Smiles 所属 4年

〈社会フィールドプログラム〉



所属している領域と研究内容について教えてください

— 赤坂

人間探求領域の人間文化です。主に西洋美術史を研究しています。もともと両親の影響で美術館やコンサートによく行っていて、文化とか芸術に興味がありました。同時に幼い頃から洋服が好きで、パリコレに出るような芸術性の高い洋服に興味がありました。総合科学部に入学したのも芸術がファッションデザインにどのように入ンスピレーションを与えているのかを研究したいと思ったことがきっかけです。卒業論文は20世紀の画家マティスが現代ファッションにどのような影響を与えたのかについて書くかと思っています。

— 山下

社会探求領域の社会フィールドです。社会探求の授業を自分の興味分野に合わせながらまんべんなく授業を選択してきました。卒業論文のテーマはあまり具体的に決まってませんが、情報とメディア、まちづくりについて興味があります。ざっくり言うと、地域と

メディアをつなげる(みたいなこと)を書きたいなあと思っています。3泊4日で行った田舎のまちづくり演習の授業が心に残っていますね。

— MoFs の活動について教えてください

— 山下

Mode for Smiles (以下、MoFs) は、2014年3月に設立し、現在はインドを主な活動地とし、ファッションを通じた自立支援として、ファッションショーの開催と職業訓練の実施を目指しています。長期休暇には実際にインドを訪れ、ショー開催の準備や商品の材料の買い付けなどを行っています。日本での活動としては、自分たちで作ったアクセサリーなどの商品販売やイベントへの参加を行っています。

今までの活動経歴としては、2015年6月に広島市内で、インドのファッションショーの前身となる観客150人規模のミニファッションショーを開催し、同年9月にはインド・コルカタで、日本領事館やメディア関係者、NGOの代表の方など計200名以上

## ☆総合科学部で輝いている人☆

参加のファッションショーを開催することができました。また、広島大学での大学祭やゆかた祭りなどでもブース出展し、今年度は、広島・東広島での知名度をアップさせたいと意気込んでいます。

MoFsの公式HP(mofs.jp)とFacebook、twitterで「Mode for smiles」と検索すれば現在のMoFsのことを詳しく知ってもらえると思うので、ぜひ見てみてください。ちなみにメンバーも大大大募集しています(笑)気軽に声をかけてください。

この活動のきっかけは、当団体代表の伊達が何度もインドに行く中で、世界有数の人口大国であるにもかかわらず、街にいる人や働いている人のほとんどが男性であるのを見て、「女性はどこにいるのだろう」と疑問を抱いたことです。インドでは、カースト(＊身分制度のことです)の低い女性たちは売春婦や家政婦といった、外から見えないところで仕事をさせられていて、奴隷同然の生活を送っています。伊達は、そういった女性たちへのインタビューを通して、「彼女たちもお祭り用に新しい服を買いたい」とか、「おしゃ

れしてきれいになりたい」といった気持ちを保持していることを知りました。女の子はみんな(もしかすると男の子も)国、貧富の差など関係なく、そういった気持ちを持っているものだと思いき、それならファッションを通じて楽しい一日をその女の子たちと作る、というのも支援のひとつの形としてアリだなと思い、仲間を集めMoFsを設立し、今に至ります。

— 2015年9月のファッションショーに至るまでについて詳しく教えてください

— 赤坂

私たちは、昨年6月にDestiny FoundationというインドのNGOと共催のファッションショーを行いました。この開催にこぎつけるまでには多くのステップがありました。その中の一つを紹介します。MoFsは、貧しい環境下にいる女の子の支援を目的としているので、女性支援のNGOと手を組むのが直接的かつ確実な方法だと考えました。そのため、2014年9月にメンバー数人がインドに赴き、首都のデリーをはじめ、コルカタ、

シリグリ、ダージリンの4都市の、合わせて10団体ほどの女性支援NGOを訪問し、女性たちの状況についての聞き取りや、ショーについてのプレゼンを行いました。帰国後、そのときの反応やスタッフの雰囲気などからいくつかの候補を絞り、2015年3月に再度インドを訪問してプレゼンや話し合いを行った結果、Destiny Foundationとの共催にこぎつきました。同年7月からは代表がインドに滞在し、事前準備やファッションショー後のアフターフォローなどを行いました。

— 実施にあたって、どのような壁がありましたか?

壁① — 山下

私たちの理想とするファッションショーは、地位の低い女性も、ファッションショーを通じて、一人の女性・人間としてきらきら輝き、人々から賞賛される。そんな場所を彼女たちと「一緒に」作り上げたい、というものでした。つまり、衣装を一緒に作り、モデルとしてランウェイに立ってほしいと考え

ていました。しかし、共催したNGOは人身売買の被害者を保護している団体で、女性たちの安全確保を最優先するためにも人前に出すことは絶対にNGだと言われました。

これはモデルとして賞賛を浴びることもショーの成果の一つとして大切だと考えていた私たちにとって、悲しい現実でした。でも、現場の最前線にいるNGOの強い要請だったので、私達が最初に思い浮かべていた形とは違った形になっても仕方がないという結論に落ち着きました。

壁②  
— 赤坂

今回ショーに関わってもらった女性たちには、スタイリストとして日本から持ってきた衣装(昨年6月に行った広島でのファッションショーのための衣装)をコーディネートするとという形で関わってもらいました。今回組んだNGOの女性たちは職業訓練として縫製技術を学んでいるため、技術を向上させるためにも服を作ってもらいたかったのですが、それかありませんでした。NGO側から、元々ある訓練のほかに新しいことをこ

なすのは時間的に厳しく、互いに初めての試みであるファッションショーはその効果が未知数のため大事な時間とお金を割けないと言われたからです。契約前から何度も確認していたことでもあるので、議論を重ねましたが結局無理でした。仕方がないので、一回目の目標はとにかくファッションショーを開催することに定め直すなど、なかなか理想通りのショーとは言えませんでした。しかし、インドの女性たちは「楽しかった」「次もあるなら今度はぜひ服を作ってみたい」など次につながる意欲・ビジョン持てたようで、その声を聞いたのはすごく嬉しかったです。NGOとの間には準備段階から様々な問題もありましたが、終わってみると共に大きなことをやり遂げたという仲間意識が芽生え、彼らのショーに対する信用を得ることにつながったのではないかと思います。

— MoFsのメンバーについて教えてください

— 赤坂

MoFsメンバーは約15人と少ない上に県外にもいるので、日頃の活動を行うのは実

質10人ぐらいしかいません。そのため、個人の役割がすごく大きくて、それぞれが一生懸命何役もこなしています。また、イベントをするときには、更に担当が増えるので、常にメンバーみんながフル稼働しています。

— お二人がMoFsに入ったきっかけは何ですか？

— 山下

私は、MoFs設立ころからメンバーに入っています。もともと国際協力に興味があり、別団体のインドワークキャンプに参加したことをきっかけに、インドに興味を持ちました。代表の伊達さんとも他のボランティア団体で知っていたので、団体を立ち上げると聞き、ファッションと国際協力というキーワード両方に興味があったのと、普通のボランティアに参加するのは色が違いすぎてユニークだなと思ってMoFsに入ることにしました。

— 赤坂

私は、もともと山下さんととても仲が良かったので、彼女の話を聞いて興味をもっていたのと、ちょうど新しいことをしたいと思っ

ていた時だったので、軽い気持ちでミーティングに参加しました。あと、ファッション関連で海外に行きたいという思いが昔から強かったのも大きな理由の一つです。海外に興味のある友達の多くは国際協力したいという理由を持っており、周りから「すごいね」って言われていたのに対し、ファッションで海外に行きたいという私は軽く見られていたのを悔しく思っていました。みんな服を着て生活しているのになんでそういう風に差を付けられるのだろうかって疑問に思っていました。自分は、ファッションは着飾るためだけのものじゃないのだと考えていたので、国際協力と一緒にそれを証明しやすいのではないかと直感的に思い、参加してみることになりました。こういったことは誰もやっていないことなので、できないことを超えると余計に満足感が得られますね。

— 新1年生、後輩に向けて何かありましたらお願いします

— 赤坂

一つ目は、大学生活すぐ終わっちゃうということ！最近のみんなとの話題はそればかりです（笑）大学生活では常に色々な選択肢とかチャンスが周りにあって、それを存分に活かす周りがすごくきらきら見えて、劣等感を感じることもたくさんありました。でも、そこで悩まずに負けじと自分の知らない世界に飛び込んだらいいと思います。自分も頑張っていたことが終わって、「次に何をしよう」って考えていた時にMofisに出会い、普段なら興味がなさそうなことだったけど飛び込んでみました。少し前に新しいことに挑戦する友達がかっこよく思えて嫉妬したのもありました。総合科学部は色々な人がいるからたくさん刺激がもらえると思います。だから、ただ羨ましく思うだけでなく自分でも（軽い気持ちでもいいので）実際に色々と挑戦してほしいです。色々なことをやったほうがいいです。

— 山下

広大にはいろいろな人がいるから、総合科学部の同級生や先輩後輩、そして他学部の人や外部の人と出会うと視野がすごく広がると思います。

あと、総科は卒論の自由度も高いから、研

究面でも色々なことに挑戦しやすいと思います。今のうちから範囲を狭めずに、色々な事にチャレンジして行ってほしいですね！

— 赤坂

好きなことを極めてみたらいいかもしれないね。でも、反対に、やってみないと自分に向いているかどうかもわからないよね。

私は、高校の時、友達と好きなものが違って、遊び・趣味の話が合わないから、家でファッション雑誌を作るみたいな一人遊びをするような子でした。当時の私を思うと、インドでも活動するグループに所属している大学生活を送っているなんて驚きです。だって、日本より暑いところにいくなんてありません！と思っていましたからです。でも、インドに行ってみたら、案外大丈夫でした。好きなことを極めるのも大事。それと同じくらい好きかわからないこと、興味がなかったことに挑戦するのもアリです。国際協力も私にとって新しいことだったし、自分に合わないと思っていたことも、とりあえずやってみることが大切だと思います。そうすると知らない自分が出てくると思います。

☆総合科学部で輝いている人☆

山下さんは、手作り雑貨商品の管理や広報でのイベントポスターのデザイン・作成等を



編集者

27生

三好香乃

上田朋子

森みずき

担当しています。実際にどんなものがあるのか見せて頂きました。

輝いている人

担当…27生

大崎壮巳

三好香乃

小川 巧

上田朋子

森みずき